

松川七郎君の「ウィリアム・ペティ」(上・下)に対する授賞審査要旨

ウィリアム・ペティ Sir William Petty (1623-1687) は十七世紀イギリスで、ヘイコンの流れをくみつつ苦学して医学をおさめ、オックスフォード大学の解剖学の教授となつた。彼は医者であつたほか、数学者、音楽家、測量師造船技術師でもあつた。しかも行政的手腕にもすぐれていたのがクロムウエルに買われ、アイルランドの土地の測量事業を託され、それにも大いに成功した。退官の後、彼はロンドンにうつり、自然科学の王立協会を作り、同志とともに全く新しい方法による社会科学にはげんだ。

新しい方法とは彼が「政治算術」とよんだもので、社会のことについても形而上学的方法はすてるべきで、それよりも「もっぱら感性的経験からのみ立論し、自然のうちに見える現象」をそのままに基礎としてその諸原因を考察すべきもので、その研究を示すについても、「比較級や最上級のことばや思弁的な議論はよろしくない。それよりも自分のいわんとするところを数 (Number) 重量 (Weight) または尺度 (Measure) をもつて表現すべしとした。これは政治のこと、経済のこと、人口のこと、富のこと、そういう現象は何であれすべて計量できる。それが計量できるなら、それは数字であらわすこともできるという主張である。これを今日のことばでいい直して見ると、社会現象は何にかぎらず数量において表現でき、それを統計によつて示すことができるものである。それならほんとうの社会科学は統計でやれるというきわめて大胆な主張である。ペティはこういう主張をしただけではない。友人とともに、また独自の体験を基礎にして何冊かの著書をした。

- (1) 『租税貢納論』 (A Treatise of Taxes and Contributions) 1662
- (2) 『アイアランドの政治的解剖』 (The Political Anatomy of Ireland) 1691
- (3) 『政治算術』 (Political Arithmeick or A Discourse) 1676

このほかにも多数の論文を書いた中には政治的理由で出版されないものもあつたが、右の書名からも想像できるように彼は政治や経済を自然物であるかのごとくに考え、それを大胆に解剖、分析して見せたのである。

さて、このペティの伝記作者著者松川七郎君は昭和十二年卒業の東大経済学士、いまは一橋大学の教授で、主として社会思想史、統計学史を研究している。そしてこの人のこの二十年間における研究が右のペティだつたのである。

松川君は一方においては右にあげたペティの主著三点を邦訳してそれに周到な解説をつけた。他方においてはペティの伝記を詳細にしらべあげ、それを多数の論文にまとめてこれを内外の雑誌に発表した。

元来ペティには生前から政治的立場の上から反对者が多かつた上に、彼の死後経済学は自由主義となつたため、なお根底において重商主義的であつた右のような彼の学問は忘れられかけていたのであるが、社会科学の上で統計が重んぜられるようになったとき、彼は統計学の創始者として尊重されるようになったが、そのほかとくにマルクスはその経済学的主張の創意を推称した。さらに最近においては計量経済学 (Econometrics) が社会科学の新しい方法として登場するようになったので、ペティはその先駆者として新しい脚光をあびるようになった。さらにまたペティの子孫であるランズダウン侯家の人々により彼の伝記や遺稿がつぎつぎに出版されたということもあつて、ペティ研究は、多くの国で多くの新しい文献を生み出した。

松川君は各国におけるこれらの文献を渉獵して、激動する十七世紀のイギリスにおいて何がゆえにこのような広般な見地と特異な方法とが、この人によつて生み出されたかを的確に語つた。これが松川君の『ウィリアム・ペティ』上(昭和三十三年)、下(昭和三十九年)二巻である。外観上はさほどの大著ではないが、内容的にはなかなかの大著である。それはペティの多くの著作について十分な分析と綜合とがなされているばかりでなく、彼がペイコンの流れをくんで彼の特異な方法を思いついた由来をくわしく追跡している。また彼がこれによつて樹立した彼の思考を實務の上に應用していかに成功したか、さらにその經驗にもとづいて彼がそれをひろく社会科学一般に及ぼしたか、それを精確に詳細に実証している。

ペティの主張もその方法も、今日からいえばなお相當に粗雑なものであつた。しかし彼の創意とそれにもとづく學問的実証の提示が社会科学に及ぼした影響力は十分に評価されるべきものであり、現に、諸国においてそうなつてゐる。しかしそういう新しい諸研究とその創始者と彼の時代とを綜合して示したものはまだない。

松川君のこの著はそういう点で世界的な意義をもつものであるとともに日本の統計学、財政学、経済学というような社会科学の綜合と実証化の新しい出発の一つのスプリング・ボードとなるであらう。